

---

# 息抜きカオス雑談！

仮面ライダーディケイド

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

息抜きカオス雑談！

### 【Nコード】

N2341V

### 【作者名】

仮面ライダーディケイド

### 【あらすじ】

息抜き雑談が、多分カオスになって帰ってきた！まえの小説の記憶を失った一人の少年の主人公の風見大介と、今の主人公の風見大介、作者も加えた、カオス雑談や新しい変身ツールも作る！

注意 駄文ですが、よろしく願います

ファイル1 大介VS大介!?(前書き)

つい作ってしまった・・・後悔は・・・3割する)キリッ

## ファイル1 大介VS大介！？

大「さて・・・ひとつ聞く」

デイ「なんだ？」

大「この空間を作ったことぐらいならまだ良い・・・」

デイ「？どうした？」

大「あのな・・・」

デイ「??」

大「なんでお前の前の小説の「記憶を失った一人の少年」の方の風見大介がいるんだよ！」

大2「これからは記憶を失った少年の方を大2ってよびます」「そんなの簡単だ！・・・暇だから！」

大「・・・作者。あとでモンスターハンターのイビルジョーに食わせてやる・・・！」

大2「安心しろ作者。そのときは俺が守ってやるから（うそだがな）」

大「・・・おい、勝負しろよ」

大2「オーケー。久々に、楽しめそうだ」

訓練場・・・

大2「そっちはもう準備オーケーか？」

大「ああ」

・・・

ディ「レディ！ファイト！」

大「ゴーカイチェンジ！」

『ゴーカイジャー！』

大2「ゴーカイジャーか・・・ライダー！セットアップ！」

ラ『イエス。セットアップ！』

大「・・・セットアップした姿が、仮面ライダー1号ってどうなんだよ」

大2「気にするな。ライダークリームゾンキック！」

ドゴオン！

大「危ない危ない・・・しかし、カブトのライダーキックにクリム  
ゾンスマッシュのフォトンブラッドを  
足しただと!?」

その後も戦いは続き・・・

大・大2「ファイナルマスター・・・スパーク!」

・・・

大「デイメンションキック!」

大2「ライダー回転キック!」

・・・

大「ブラック・マジック!」

大2「ラス・オブ・ネオス!」

[illegible]

「勝負あり！……大介2の勝利！」

大2「おばあちゃんは言っていた。おれは風の行くまま、どこにでも行く風の男・・・風見大介だ！」

大「いつつ・・・あそこでゴーカイガンが当たったら隙ができて勝てたとおもったんだが・・・」

ディ「まあそうだな」

大2「まあでも結構強かったぜ！」

大「次回！俺達は、遊戯王の世界のデュエルアカデミアに入学することになった！もちろん、遊戯十代もいて・・・クロノス先生と戦うことになった！初めて使う戦隊＆ライダーデッキ！はたして大介は勝てるのか！」

「次回！遊戯王編！」

## ファイル2 ライダー&戦隊クイズ！

分「さあはじまりました！このクイズは、ライダーと戦隊のクイズを出します！出場者は、いつものメンバーに、もやし、クウキ、ナツミカン、コソ泥のディケイド一向が出場します！出題者は、クイズ・マシーン！レッツ・ゴー！」

「1問。デカレンジャーの戦士の人数は？」

ポーン！

『門矢士』

士「8人！」

ブッブー！

士「いてっ・・・」

ポーン！

『海東大樹』

海東「9人！」

ブッブー！



海東「いたつ！・・・え！？映画のをあわせたらこれであってるはず・・・」

ポーン！

『風見大介2』

大2「十人！」

『正解だ。デカレッド、デカブルー、デカグリーン、デカイエロー、デカピンク、デカブレイク、デカマスター、デカスワン、デカゴールド、デカブライトの十人だ』

士「おい！デカブライトって何だよ！？」

『テツの元上司。以上！第二問。オーズのコンボの数は？』

士「十個！」

『正解だ』

夏「え！？タトバ、ガタキリバ、ラトラーター、サゴーズ、タジャドル、シャウタ、プトティラ、タマシー、ブラカワニの九個じゃないんですか！？」

『恋愛コンボも含まれる』

士「（間違えて、十って言ってしまったが・・・まさか合ってたと

は」

『次だ・・・これは難しいぞ。オール仮面ライダー。ライダージェネレーションの、一番右端のライダーは？』

全『分かるわけねえだろうがああああああ！！！！！！！』

士『わかるか！？』

夏『分かりませんよ！』

ユ『俺もわからないよ！？』

海東『これがわかったわすごいよ！？』

大『おれ買って遊んだけど、覚えているわけねえだろ！？』

大2『以下同文』

デイ『右に同じく』

『正解は・・・覚えていない』

全『おい！？』

『後半へ続く！ちなみに、後半はバトルだぞ』

全『おい！？』

### ファイル3 バトルスタート！

『これよりバトルをはじめる。作者とクウキは異次元に飛ばした』

大「なんとも哀れな・・・ゴークイチェンジ！」

『ゴークイジャー！』

大2「・・・変身！」

『キャストオフ！チェンジ・ビートル！』

士「変身！」

『カメンライド・・・ディケイド！』

夏「キバーラ！」

キ「はいはい！行くわよ！」

夏「変身！」

『実況と解説はわたしがやる。おおっと！キバーラが即座にゴークイレッドに切りかかった！だがそれをゴークイサーベルで軽々しく受け止める！おおっと！キックだ！回し蹴りキック！キバーラ吹き飛ばされる！アウトオオオオオオオオオオオオオオオ！ちなみに、かったチームが、賞金を手にできるぞ』

士「何！？・・・なら、これだ！」

『カメンライド・・・カブト!』

『アタックライド・・・クロックアップ!』

大2「げ!?クロックアップ!」

『クロックアップ!』

大「ライダーチェンジ!」

『ハイパーカブト!』

大「ハイパークロックアップ!」

『ハイパークロックアップ!』

『マキシマムハイパーサイクロン!』

大2・士「ぐあああああああああああ?????  
!?!?!?」

『決まった・・・優勝者は風見大介だ!』

大2「・・・ハイパーゼクター呼べばまだわからなかったのに!」

士「ハイパークロックアップのカードなんてもってねえよ!」

大「やっぱり俺は強かった!」

『お前には、賞金一億円をやるっ』

大「っしゃ！これで、3D が買える！」

デイ「やっと戻ってこられた・・・あ、そうそう。つぎからは、記憶を失った一人の少年のリメイク版を予定しております！練習代わりなので、よかったら、見てください！」

ファイル4！ 記憶を失った一人の少年1！（前書き）

・・・すみません。基本リメイク版なのに、台本描きです。すみません

## ファイル4！ 記憶を失った一人の少年1！

？「・・・ここはどこだ？」

俺は森の中にいた・・・覚えていること・・・自分の風見大介という、名前と、仮面ライダー・・・スーパー戦隊？何だこれ・・・

？『お目覚めですか？』

いきなり俺の右腕のブレスレッドが喋った！？

？『驚かせてしまつてすいません。私は、ライダーという名前です』

大「そ、そうか・・・よろしくな」

ラ『はい、よろしくお願いします、マスター』

大「ところで、何で喋れR「イーーーーーッ！！」！？何だ！」

ラ『・・・マスター！その草むらに隠れてください！』

俺は、すぐに草むらの影に隠れた・・・なんだあいつらは？全身が黒タイツ・・・くっ！？

ラ『マスター！？大丈夫ですか！？』

・・・

俺は、何故か草むらを飛び出した

ラ『マスター！？なにやっているんですか！？』

大「・・・ライダー、何故か分からないが、俺はあいつらの事を知っている」

あいつらは、シヨッカー戦闘員・・・

ラ『え！？』

シ「イーッ！（略 見つけたぞ！覚悟しろ！）」

大「・・・パック展開！」

俺が、無意識にそういつたと同時に、空間が開き、その中から、あるものを取り出した・・・それは

大「モバイレッツとレンジャーキー・・・うつ！？・・・使い方は分かった。行くぜ！ゴーカイチェンジ！」

俺は、そのレンジャーキーを、フィギュアから、キーの状態にし、それをモバイレッツに差し込んだ

『ゴーカイジャー！』

シ「イーッ！！！！（かかれえ！）」

変身したと同時に、シヨッカー戦闘員が、飛び掛ってきた。が



シ「イーッ!？」

光がでたと同時に、吹き飛ばされた。そしておれは自身ありげにこ  
う名乗った

大「ゴークイレッド!」

シ「イーッ!?(な、ゴークイレッドだと!?!くっ!今回は引くぞ  
!)」

驚いたような顔をして、立ち去っていった・・・戦えなかったし、  
不幸・・・なのか?

大「ふう・・・!？」

俺は、変身を解いたと同時に、倒れてしまった

ラ「マスター!?!どうしたんですか!?!マスター、マスター――  
――!?!」

？「ほう・・・俺が放ったショットカー戦闘員を倒したか・・・転生者だな。あいつを殺して、なのは達をメロメロにしてやる！」

物語は、転生者を3人迎えていた・・・

## 記憶を失った一人の少年2

大「・・・？ここは・・・どこだ？」

気がついたら俺は資料が沢山ある所にいた・・・？

？「気がついたみたいだね」

大「！？」

いきなり声がしたので、声がしたほうをむいてみた

ジェ「私はジェイル・スカリエッティ。あ、君のデバイスだ」

そついい、俺にライダーを投げてきた

ラ「マスター・・・もう、私お嫁にいきません・・・シクシク。機械なので、お嫁にはいきませんが・・・シクシク」  
機

大「・・・あはは。所で、何で俺がこんなところにいるんだ？」

ラ「私が転送魔法を掛けたからですよ。私は基本、マスターが生きて、尚且つマスターが持っていたらいつでも使えます」

ジェ「すごいねえ・・・もう一回君の構造w」お断りです！・・・  
冗談だよ」

こいつ、マジでやる気だったろ！？

大「もう一つ。何で助けてくれたんだ？」

ジェ「気まぐれってやつだね…何故かほうって置けないって感じがしたんだよ」

大「ふん…」

その後、俺とスカリエッティは色々話し合った。

ジェ「私はこの世界を、ゆりかごとという兵器で変えようと思うんだ。そのためには、君の協力も必要だと思う。だから、力を貸してくれないか？」

大「上等だ。ただし、ここに住ませてくれよ？」「ああ」ところでひとつ聞かせてもらう…何をすればいいんだ？「レリックという、紅い石？を集めればオーケーだ」それをやるのはいつだ？」

ジェ「…6年後だね」

はあ…

大「それまでちょっと旅に出てもいいか？」

ジェ「構わないよ。6年後に、帰ってきてくれれば、それでいい」

大「じゃあ、いつてくるぜ！」

ジエ「ああ！」

俺はその基地から出て行った・・・とはいったものの

大「どうしようかねえ・・・！？くっ・・・」

ラ「マスター！？大丈夫ですか！？」

ライダーがそう俺に呼びかけてくる

大「・・・ああ、大丈夫だ。それより一つ聞きたい事がある」

ラ「なんでしよう？」

大「仮面ライダーカブト・ハイパーフォームって知ってるか？なんかしらんが、勝手に記憶がながれ混んできたみたいなんだが・・・」

ラ「カブト・ハイパーフォームは、カブトの強化形態で、ハイパーフォームが持つ、ハイパークロクアップは、光の速さを遥かに超えて、移動出来ます」

大「・・・やってみるか。カブトゼクター！ハイパーゼクター！」

突如、上空から赤いカブトムシと、銀色のカブトムシが飛んできた

大「変身！ハイパーキャストオフ！」

『ハイパーキャストオフ。チェンジ・ハイパービートル！』

大「・・・理解した。ハイパークロクアップ！」

『ハイパークロックアップ!』

そして俺は平行世界を移動した。いろんな世界に行き、いろんな奴にあった。通りすがりの仮面ライダーとか、宇宙海賊とか、キングオブ・デュエリストとか、博霊の巫女とか・・・まあ色々だ。そして、六年はあっという間に過ぎていた・・・

視点？

ハ―イ！俺は天道零時！浴に言う、転生者なんだ！

能力は

全仮面ライダーに変身できる能力

魅了のスキル（自分が15歳以上にならないと効果は出ない）

ゲートオブ・パビリオン  
王の秘宝

何でも召喚できる

どうだ！最強だろう！

見た目は、天道総司そのまま！ははは！俺が主人公だ！

な「天道くゝん！」

おっ、いとしのマイハニーが来たか！

天「どうしたんだいなのは？」

な「大好き！」

フ「私だって！」

は「うちだって！」

シ「私だって！」

シャ「私もよ！」

全「天道！（くん）（さん）大すき！！！」



視点？

私は、マリア・レイ

浴に言う転生者ね。私は、反管理局「ブルーフリーダム」の一番上の人間。能力は・・・

剣の扱いを最大限にまで引き出せる

頭の中で創造した剣を手元に出せる

クロックアップ並の速さを出すことができる

ジェイル・スカリエッティとは、4年後辺りに、共闘するつもりだ。なぜかって？

彼は、悪そうなやつではなかったからだ。

だが、そのジェイルの研究所に、前に訪問したときに、隠しカメラをつけた。

念のためだったが・・・悪い人ではないようだ

そして、今日。転生者みたいな子供がジェイルの研究所に転送した。デバイスが勝手に転送したらしい・・・謎だ。あの子は、記憶を失っているのは本当みたいだが・・・

「まあこの事はあとにして、問題はあのなのは達の中にいる転生者ね。みたところ、訓練もしっかりしているから、一筋縄ではいかなさそうね・・・」

こうして、六年後。全ての物語が始まった・・・

### 記憶を失った一人の少年3！

大「・・・ライダー？」

ラ『はい』

大「俺は、スカリエッティの所に転送しろといったよな？」

ラ『はい』

大「ここは？」

ラ『・・・リニアレールです』

大「スカリエッティに頼んで、バラバラな」それだけは止めてくださいマスター！」「たく・・・」

ラ『ここにはレリックもあるのでそれをついでに取っていきましよう』

・・・こいつ、話を誤魔化したな？

大「ししゃあない、いくぞティード」

テ「わかったぜ」

こいつはティード。いろんな所を旅している時に、こいつが死にかけだったので助けてやった。どうやら、管理局が隠密に殺したと思ってたみたいだな

・・・少年移動中・・・

大「やつとついたぞ」その人！とまりなさい！」・・・誰だ？」

後ろから声がしたので、振り向いてみるとそこにはオレンジ色の髪の毛の女の子と、青髪の女の子がいた

テ「時空管理局機動六課スターズのティアナ・ランスターです！ここでなにをしているんですか！？」

大「げ・・・」

ラ「マスター、戦いましょう」

大「それしかないな」

テ「事情聴取のため、動向をお願いします」

大「断る！」

テ「・・・それなら力ずくでも！」

大「出来るならなあ！パック展開！サモン！ラッパッター！」

俺がそう呼ぶと、手にラッパッターが現れた

大「ふむ・・・これだ！」

俺は、ラッパッターをもう一個だし、レンジャーキーというものをラッパの上の部分にさし、ラッパッターを吹いた

大「　　」

俺の前にある戦隊が現れた・・・それは

「デカレッド！」

「デカブルー！」

「デカグリーン！」

「デカイエロー！」

「デカピンク！」

「デカブレイク！」

「デカマスター！」

「デカスワン！」

「デカゴールド！」

「デカブライト！」

『特捜戦隊！デカレンジャー！』

大「警察には警察ってね あとはよろしく〜！」

そついい、俺はレリックケースを持って転送した。ティード？あ、あいつ空気だったな・・・

テ「・・・すいません」

ス「・・・すいません」

は「それよりも、この召喚した男が気になるなあ・・・」

天「ま、どうせ俺の敵じゃあないさ」

は&フ&な「キャ~~~~!!天道君格好いい!」

テ&ス「(なんで部隊長たちはこんなブサイクの男が好きなんだろう・・・)」

大介達の戦い?を見ていた人がいた……

?「あれが新しい俺の力の後継者、風見大介か……よし、あとで会ってみよう」

その者はかつてインフェルシアから地球を守ったマジレンジャーのマジレッド、小津魁だった……

スカリエッティのアジト内部

大「よ、スカさん」

ス「ああ、大介。久しぶりだね」

大「そうそう、これ俺の土産ね」

ス「・・・レリック？！まさか、リニアレールにいた未確認って・・・」

大「すまん多分それ俺」

ス「・・・本当にきみは凄いねえ・・・」

大「それが俺！」

ス「そうそう、君がいない間に反管理局と手を組んだんだよ。たしか、ブルーフリーダムだったかなあ・・・」

？「それであつてるぞ」

大「！？」

いきなり声が聞こえたので後ろを向くと・・・女がいた。っていうか、このパターン結構多いな

レイ「驚かしてごめんなさい、私はマリア・レイ。いきなりだけど、風見大介。貴方に話があるの。着いてきてくれない？」

大「？別に良いけど・・・」



そして、俺はレイに着いていった・・・

記憶を失った一人の少年3！（後書き）

紅 幽鹿様感想ありがとうございます！

## 記憶を失った一人の少年4！

視点大介

訓練所にきたら、突然レイに剣を向けられた

レ「ためさせてもらおうか。お前の力を！」

そっつい、俺に切りかかってきたが、俺はすぐに右によけた。そう、よけたはずだった（……………）

大「ぐっ!?!」

ラ『マスター！クロックアップです!』

大「クロックアップ!」

俺は、ライダーの補助がりの条件で、カブトライダースじゃなくても、クロックアップが出来るようになった

大（こいつ・・・剣の扱いに慣れている!）

そう思いながら、俺はブレイラウザーを手元に出し、切りかった!

ギン!ギン!

剣と剣のぶつかりあいでも俺もレイももうあと一発くらいしか全力を出せない

レ「次で決めるぞ！……三刀流奥義！三・千・世・界！！」

大「……」

ドオオオオン！

レイ視点

決まった……やはり、転生者は皆自分の力に頼るしか方法がないのか。自分の技も磨かないと、相手には勝てない。

大「おいおい、決まったとも思ったのか？」

な！？

大介視点

大「危なかったぜ。ライダー、ありがとな」

ラ「いえ。当然の事をしたまでです」

ぶつかる直前に、ライダーがプロテクションを張ってくれたから、助かったぜ。

大「今度はこっちから行くぞ！ライダー！メダルシステムの準備は

！？」

ラ『バリバリでオツケーです！』

大「行くぞ！メダル挿入！」

『タカ！タカ！タカ！クジャク！クジャク！クジャク！コンドル！コンドル！超ギガスキャン！』

大「はああああ・・・セイヤアアア！！！！！」

俺は、集中力を高め、火の鳥をレイにぶつけた。

ス「何の冗談だいこれは？訓練所が崩壊しているジャマイカ！？」

レ 大  
「 」  
>  
<  
「 」

記憶を失った一人の少年5 燃える炎のエLEMENT

大「ううむ・・・」

ス「どうしたんだい、大介？」

大「それが、ゴーカイジャー以外のレンジャーキーが全てないんだよ。まるで、魔法で消えたかのように」

そう、俺はレンジャーキーをちょっと使おうと思ったら、いつの間になくなっていた

ス「おかしいねえ・・・あ、そうそう。ナンバーズの事を忘れていたよ」

大「ナにそれ？」

ナンバーズっていったら、希望皇 一輝くらいしか思いつかないぞ？

そう思っていたら11人くらい中に入ってきた。

ス「右からウーノ、トーレ、クアットロ、チンク、セイン、セツテ、オットー、ノーヴェ、ディエチ、ウエンディ、ディードだよ。ここにはいないけど、ドウエっていうこもいるよ」

大「なるほどねえ・・・レンジャーキーでも探してくるわ」

ス「分かった」

そして、俺はレンジャーキーを探しにいったが……

大「何でゴーミン、スゴーミンがいるんだよお！？もう仕方ない！ライダー！セットアップ！」

「オーライ、セツトアップ！」

大「うらあああ!!!」

まずは2体のゴーミンをラリアットで倒し、そのゴーミンを台にして上にジャンプしスゴーミンめがけてキックし、トライアルもビツ



クリ！の速さでゴーミン、スゴーミンを殴り倒していく。

大「やっと倒せたかぁ・・・」

？「君が風見大介だね？」

突如、後ろから声が掛けられたので、振り向くと黒いローブを身にまとまっている青年がいた。

「僕は小津魁。君は後一回戦うと死んでしまう」

その言葉に俺は反応する

大「なに？どういうことだ」

魁「君は、戦いすぎた結果、後一回戦いをすると死んでしまう体になった」

く後編に続くく

記憶を失った一人の少年5 燃える炎のエレメント（後書き）

次回の魔法少女リリカルなのはは

大「くっ・・・やはりあいつがいつていたように、体が・・・」

魁「分かったようだね。それでも戦うかい？」

大「これが、俺の選択だあ！マージ・マジ・マジロー！」

「・・・全てを見つめる者は次に何を見る！？・・・」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2341v/>

---

息抜きカオス雑談！

2011年10月10日11時30分発行